もの思う葦

——当りまえのことを当りまえに語る。

太宰治

はしがき

もの思う葦（あし）という題名にて、日本浪曼派（ろうまんは）の機関雑誌におよそ一箇年ほどつづけて書かせてもらおうと思いたったのには、次のような理由がある。
「生きて居ようと思ったから。」私は生業（なりわい）につとめなければいけないではないか。簡単な理由なんだ。
私は、この四五年のあいだ既に、ただの小説を七篇も発表している。ただとは、無銭の謂（い）いである。けれどもこの七篇はそれぞれ、私の生涯の小説の見本の役

目をなした。発表の当時こそ命かけての意気込みもあったのであるが、結果からしてみると、私はただ、ジャアナリズムに七篇の見本を提出したに過ぎないということになったようである。私の小説に買い手がついた。売った。売ってから考えたのである。もう、そろそろ、ただの小説を書くことはやめよう。慾がついた。

「人は生涯、同一水準の作品しか書けない。」コクトオの言葉と記憶している。きょうの私もまた、この言葉を楯（たて）に執（と）る。もう一作拝見、もう一作拝見、てうかしがましい市場の呼び声に私は答える。「同じことだ。

――舞台を与えよ。――私はお気に入るだろう。――こいしくばたずね来てみよ。私は袋の中から七篇の見本をとりだして、もいちどお目にかけるまでのことだ。私はその七篇にぶち撒かれた私の血や汗のことは言わない。見れば判るにきまっている。すでにすでに私には選ばれる資格があるのだ。」買い手がなかったらどうしようかしら。

私には慾がついて、よろずにけち臭くなって、ただで小説を発表するのが惜しくなって来たのだけれども、もし買いに来るひとがなかったなら、そのうちに、私の名前がだんだんみんなに忘れられていって、たしか

に死んだ筈だがと薄暗いおでんやなどで噂（うわさ）をされる。それでは私の生業もなにもあったものでない。いろいろ考えてからもの思う葦という題で毎月、あるいは隔月くらいに五六枚ずつ様々のことを書き綴ってゆこうというところに落ちついたのだ。みなさんに忘れられないように私の勉強ぶりをときたま、ちらっと覗（のぞ）かせてやろうという卑猥（ひわい）な魂胆のようである。

デカルトの「激情論」は名高いわりに面白くない本であるが、「崇敬とはわれに益するところあらむと願望する情の謂(い)いである。」としてあったものだ。デカルトあながちぼんくらじゃないと思ったのだが、「羞恥(しゅうち)とはわれに益するところあらむと願望する情の謂いである。」もしくは、「軽蔑とはわれに益するところあらむと云々(うんぬん)。」といった工合いに手当りしだいの感情を、われに益する云々てう句に塡(は)め込んでいってみても、さほど不体裁な言葉にならぬ。いっそ、「どんな感情でも、自分が可愛いからこそ起る。」と言ってしまって

も、どこやら耳あたらしい一理窟として通る。献身とか謙譲とか義俠とかの美徳なるものが、自分のためという慾念を、まるできんたまかなにかのようにひたがくしにかくさせてしまったので、いま出鱈目に、「自分のため」と言われても、ああ慧眼と恐れいったりすることがないともかぎらぬような事態にたちいたるので、デカルト、べつだん卓見を述べたわけではないのである。人は弱さ、しゃれた言いかたをすれば、肩の木の葉の跡とおぼしき箇所に、射込んだふうの矢を真実と呼んでほめそやす。けれども、そんな判り切った弱さに射込むよりは、それを知っていながら、わざとその

箇所をはずして射ってやって、相手に、知っているなと感づかせ、しかも自分はあくまでも、知らずにしくじったと呟いて、ほんとうに知らなかったような気になったりするのもまた面白くないか。虚栄の市の誇りもここにあるのだ。この市に集うもの、すべて、むさぼりくらうこと豚のごとく、さかんなること狒狒のごとく、凡そわれに益するところあらむと願望するの情、この市に住むものたちより強きはない。しかるにまた、献身、謙譲、義侠のふうをてらい、鳳凰、極楽鳥の秀抜、華麗を装わむとするの情、この市に住むものたちより激しきはないのである。そう言う私だとて

病人づらをして、世評などは、と涼しげにいやいやをして見せながらも、内心如夜叉（にょやしゃ）、敵を論破するためには私立探偵を十円くらいでたのんで来て、その論敵の氏と育ちと学問と素行と病気と失敗とを赤裸々に洗わせ、それを参考にしてそろそろとおのれの論陣をかためて行く。因果。

「私は、はかなくもばかげたこの虚栄の市を愛する。私は生涯、この虚栄の市に住み、死ぬるまでさまざまの甲斐（かい）なき努力しつづけて行こうと思う。」

　虚栄の子のそのような想念をうつらうつらまとめてみているうちに、私は素晴らしい仲間を見つけた。ア

ントン・ファン・ダイク。彼が二十三歳の折に描いた自画像である。アサヒグラフ所載のものであって、児島喜久雄というひとの解説がついている。「背景は例の暗褐色。豊かな金髪をちぢらせてふさふさと額（ひたい）に垂らしている。伏目につつましく控えている碧（あお）い神経質な鋭い目も、官能的な桜桃色の唇も相当なものである。肌理（きめ）の細かい女のような皮膚の下から綺麗（きれい）な血の色が、薔薇色（ばらいろ）に透いて見える。黒褐色の服に雪白の襟（えり）と袖口（そでぐち）。濃い藍（あい）色の絹のマントをシックに羽織っている。この画は伊太利亜（イタリア）で描いたもので、肩からかけて居る金鎖はマントワ侯の贈り物だという。」またいう、

「彼の作品は常に作後の喝采を目標として、病弱の五体に鞭うつ彼の虚栄心の結晶であった。」そうであろう。堂々と自分のつらを、こんなにあやしいほど美しく書き装うてしかもおそらくは、ひとりの貴婦人へ頗る高価に売りつけたにちがいない二十三歳の小僧の、臆面もなきふてぶてしさを思うと、――いたたまらぬほど憎くなる。

曳(ひ)かれものの小唄という言葉がある。瘦馬(やせうま)に乗せられ刑場へ曳かれて行く死刑囚が、それでも自分のおちぶれを見せまいと、いかにも気楽そうに馬上で低吟する小唄の謂いであって、ばかばかしい負け惜しみを嘲(あざわら)う言葉のようであるが、文学なんかも、そんなものじゃないのか。早いところ、身のまわりの倫理の問題から話をすすめてみる。私が言わなければ誰も言わないだろうから、私が次のようなあたりまえのことを言うても、何やら英雄の言葉のように響くかも知れないが、だいいちに私は私の老母がきらいである。生み

の親であるが好きになれない。無智。これゆえにたまらない。つぎに私は、四谷怪談の伊右衛門に同情を持つ者であるということを言わなければならない。まったく、女房の髪が抜け、顔いちめん腫れあがって膿が流れ、おまけにちんば、それで朝から晩までめそめそ泣きつかれていた日には、伊右衛門でなくても、蚊帳を質にいれて遊びに出かけたくなるだろうと思う。つぎに私は、友情と金銭の相互関係について、つぎに私は師弟の挨拶について、つぎに私は兵隊について、いくらでも言えるのであるが、いますぐ牢へいれられるのはやはりいやであるからこの辺で止す。つまり私に

は良心がないということを言いたいのである。はじめからそんなものはなかった。鞭影への恐怖、言いかえれば世の中から爪弾きされはせぬかという懸念、牢屋への憎悪、そんなものを人は良心の呵責と呼んで落ちついているようである。自己保存の本能なら、馬車馬にも番犬にもある。けれども、こんな日常倫理のうえの判り切った出鱈目を、知らぬ顔して踏襲して行くのが、また世の中のなつかしいところ、血気にはやってばかな真似をするなよ、と同宿のサラリイマンが私をいさめた。いや、と私は気を取り直して心のなかで呟く。ぼくは新しい倫理を樹立するのだ。美と叡智とを

規準にした新しい倫理を創るのだ。美しいもの、怜悧（れいり）なるものは、すべて正しい。醜と愚鈍とは死刑である。そうして立ちあがったところで、さて、私には何が出来た。殺人、放火、強姦、身をふるわせてそれらへあこがれても、何ひとつできなかった。立ちあがって、尻餅（しりもち）ついた。サラリイマンは、また現われて、諦念（ていねん）と怠惰のよさを説く。姉は、母の心配を思え、と愚劣きわまる手紙を寄こす。そろそろと私の狂乱がはじまる。なんでもよい、人のやるなと言うことを計算なく行う。きりきり舞って舞って舞い狂って、はては自殺と入院である。そうして、私の「小唄」もこの直後からはじ

まるようである。曳かれもの、身は痩馬にゆだねて、のんきに鼻歌を歌う。「私は神の継子（ままこ）。ものごとを未解決のままで神の裁断にまかせることを嫌う。なにもかも自分で割り切ってしまいたい。神は何ひとつ私に手伝わなかった。私は霊感を信じない。知性の職人。懐疑の名人。わざと下手（へた）くそに書いてみたりわざと面白くなく書いてみたり、神を恐れぬよるべなき子。判り切っているほど判っているのだ。ああ、ここから見おろすと、みんなおろかで薄汚い。」などと賑やかなことであるが、おや、刑場はすぐもうそこに見えている。そうしてこの男も「創造しつつ痛ましく勇ましく没落

して行くにちがいない。」とツァラツストラがのこのこ出て来ていらざる註釈を一こと附け加えた。

或る実験報告

人は人に影響を与えることもできず、また、人から影響を受けることもできない。

老年

ひとにすすめられて、「花伝書」を読む。「三十四五歳。このころの能、さかりのきはめなり。ここにて、この条条を極めさとりて、かんのう（堪能）になれば、定めて天下《てんが》にゆるされ、めいぼう（名望）を得つべし。若《もし》、この時分に、天下のゆるされも不足に、めいぼうも思ふほどなくは、如何《いか》なる上手なりとも、未《いまだ》まことの花を極めぬして（仕手）と知るべし。もし極めずは、四十より能はさがるべし。それ後の証拠なるべし。さ

る程に、あがるは三十四五までの比、さがるは四十以来なり。返返この比天下のゆるされを得ずは能を極めたりとおもふべからず。云々。」またいう。「四十四五。この比よりの手だて、大方かはるべし。たとひ、天下にゆるされ、能に得法したりとも、それにつけても、よき脇のして（仕手）を持つべし。能はさがらねども、ちからなく、やうやう年闌けゆけば、身の花も、よそ目の花も失するなり。先すぐれたるびなん（美男）は知らず、よき程の人も、ひためん（直面）の申楽は、年よりては見えぬ物なり。さるほどに此一方は欠けたり。この比よりは、さのみにこまかなる物まねをばす

まじきなり。大方似あひたる風体を、安安とほねを折らで、脇のして（仕手）に花をもたせて、あひしらひのやうに、少少とすべし。たとひ脇のして（仕手）なからんにつけても、いよいよ細かに身をくだく能をばすまじきなり。云々。」またいう。「五十有余。この比よりは、大方せぬならでは、手だてあるまじ。麒麟も老いては土馬に劣ると申す事あり。云々。」

次は藤村の言葉である。「芭蕉は五十一で死んだ。（中略）これには私は驚かされた。老人だ、老人だ、と少年時代から思い込んで居た芭蕉に対する自分の考えかたを変えなければ成らなくなって来た。（中略）『四

十ぐらいの時に、芭蕉はもう翁という気分で居たんだね。』と馬場君も言っていた。（中略）兎に角、私の心の驚きは今日まで自分の胸に描いて来た芭蕉の心像を十年も二十年も若くした。云々。」

露伴の文章がどうのこうのと、このごろ、やかましく言われているけれども、それは露伴の五重塔や一口剣などむかしの佳品を読まないひとの言うことではないのか。

王勝間にも以下の文章あり。「今の世の人、神の御社は寂しく物さびたるを尊しと思ふは、古の神社の盛りなりし世の様をば知らずして、ただ今の世に大方古

く尊き神社どもはいみじくも衰へて荒れたるを見なれて、古く尊き神社は本よりかくあるものと心得たるからのひがごとなり。」

けれども私は、老人に就(つ)いて感心したことがひとつある。黄昏(たそがれ)の銭湯の、流し場の隅(すみ)でひとりこそこそやっている老人があった。観ると、そまつな日本剃刀(かみそり)で鬚(ひげ)を剃っているのだ。鏡もなしに、薄暗闇のなかで、落ちつき払ってやっているのだ。あのときだけは唸(うな)るほど感心した。何千回、何万回という経験が、この老人に鏡なしで手さぐりで顔の鬚をらくらくと剃ることを教えたのだ。こういう具合の経験の堆積(たいせき)には、私た

ち、逆立ちしたって負けである。そう思って、以後、気をつけていると、私の家主の六十有余の爺もまた、なんでもものを知っている。植木を植えかえる季節は梅雨時に限るとか、蟻を退治するのには、こうすればよいとか、なかなか博識である。私たちより四十も多く夏に逢い、四十回も多く花見をし、とにかく、四十回も其の余も多くの春と夏と秋と冬とを見て来たのだ。けれども、こと芸術に関してはそうはいかない。「点三年、棒十年」などというやや悲壮な修業の掟は、むかしの職人の無智な英雄主義にすぎない。鉄は赤く熱しているうちに打つべきである。花は満開のうちに眺

むべきである。私は晩成の芸術というものを否定している。

難解

「太初(はじめ)に言(ことば)あり。言は神と偕(とも)にあり。言は神なりき。この言は太初に神とともに在り。万(よろず)の物これに由(よ)りて成り、成りたる物に一つとして之(これ)によらで成りたるはなし。之に生命(いのち)あり。この生命は人の光なりき。光

は暗黒（くらき）に照る。而（しか）して暗黒は之を悟らざりき。云々。」私はこの文章を、この想念を、難解だと思った。ほうぼうへ持って廻ってさわぎたてたのである。

けれども、あるときふっと角度をかえて考えてみたら、なんだ、これはまことに平凡なことを述べているにすぎないのである。それから私はこう考えた。文学に於いて、「難解」はあり得ない。「難解」は「自然」のなかにだけあるのだ。文学というものは、その難解な自然を、おのおの自己流の角度から、すぱっと斬っ（たふりをし）て、その斬り口のあざやかさを誇ることに潜んで在るのではないのか。

塵中（じんちゅう）の人

寒山詩は読んだが、お経（きょう）のようで面白くなかった。なかに一句あり。

　悠悠たる塵中の人、
　常に塵中の趣を楽む。
　云々。

「悠悠たる」は嘘だと思うが、「塵中の人」は考えさせ

られた。
　玉勝間にもこれあり。
「世々の物知り人、また今の世に学問する人なども、みな住みかは里遠く静かなる山林を住みよく好ましくするさまにのみいふなるを、われは、いかなるにか、さはおぼえず、ただ人繁く賑はしき処の好ましくて、さる世放れたる処などは、さびしくて、心もしをるるやうにぞおぼゆる。云々。」
　健康とそれから金銭の条件さえ許せば、私も銀座のまんなかにアパアト住いをして、毎日、毎日、とりかえしのつかないことを言い、とりかえしのつかないこ

とを行うべきでもあろうと、いま、白砂青松の地にいて、籐椅子にねそべっているわが身を抓っている始末である。住み難き世を人一倍に痛感しまことに受難の子とも呼ぶにふさわしい、佐藤春夫、井伏鱒二、中谷孝雄、いまさら出家遁世もかなわず、なお都の塵中にもがき喘いでいる姿を思うと、——いやこれは対岸の火事どころの話でない。

おのれの作品のよしあしをひとにたずねることに就いて

自分の作品のよしあしは自分が最もよく知っている。千に一つでもおのれによしと許した作品があったならば、さいわいこれに過ぎたるはないのである。おのおの、よくその胸に聞きたまえ。

書簡集

おや？　あなたは、あなたの創作集よりも、書簡集のほうを気にして居られる。――作家は悄然とうなだれて答えた。ええ、わたくしは今まで、ずいぶんたくさんの愚劣な手紙を、ほうぼうへ撒きちらして来ましたから。（深い溜息をついて、）大作家にはなれますまい。

これは笑い話ではない。私は不思議でならないのだ。日本では偉い作家が死んで、そのあとで上梓する全集へ、必ず書簡集なるものが一冊か二冊、添えられてある。書簡のほうが、作品よりずっと多量な全集さえ、あったような気がするけれど、そんなのには又、特殊

な事情があったのかも知れない。
作家の、書簡、手帳の破片、それから、作家御十歳の折の文章、自由画。私には、すべてくだらない。故作家と生前、特に親交あり、いま、その作家を追慕するのあまり、彼の戯れにものした絵集一巻、上梓して内輪の友人親戚間にわけてやるなど、これはまた自ら別である。あかの他人のかれこれ容喙すべき事がらでない。
私は一読者の立場として、たとえばチエホフの読者として、彼の書簡集から何ひとつ発見しなかった。私には、彼の作品「鷗」の中のトリゴーリンの独白を書

簡集のあちこちの隅からかすかに聴取できただけのことであった。

読者あるいは、諸作家の書簡集を読み、そこに作家の不用意きわまる素顔を発見したつもりで得々としているかも知れないが、彼等がそこでいみじくも、摑まされたものはこの作家もまた一日に三度三度のめしを食べた、あの作家もまた房事を好んだ、等々の平俗な生活記録にすぎない。すでに判り切ったことである。それこそ、言うさえ野暮な話である。それにもかかわらず、読者は、一度摑んだ鬼の首を離そうともせず、ゲエテはどうも梅毒らしい、プルウストだって出版屋

には三拝九拝だったじゃないか、孤蝶と一葉とはどれくらいの仲だったのかしら。そうして、作家が命をこめた作品集は、文学の初歩的なるものとしてこれを軽んじ、もっぱら日記や書簡集だけをあさり廻るのである。曰(いわ)く、将を射んと欲せば馬を射よ。文学論は更に聞かれず、行くところ行くところ、すべて人物月旦(げったん)はなやかである。

作家たるもの、またこの現象を黙視し得ず、作品は二の次、もっぱらおのれの書簡集作成にいそがしく、十年来の親友に送る書簡にも、袴(はかま)をつけ扇子(せんす)を持って、一字一句、活字になったときの字づらの効果を考慮し、

他人が覗いて読んでも判るよう文章にいちいち要らざる註釈を書き加えて、そのわずらわしさ、ために作品らしき作品一つも書けず、いたずらに手紙上手の名のみ高い、そういうひとさえ出て来るわけではないか。

書簡集に用いるお金があったなら、作品集をいよいよ立派に装釘するがいい。発表されると予期しているような、また予期していないような、あやふやな書簡、及び日記。蛙を摑まされたようで、気持ちがよくないのである。いっそどちらかにきめたほうが、まだしもよい。

かつて私は、書簡もなければ日記もない、詩十篇ぐ

らいに訳詩十篇ぐらいの、いい遺作集を愛読したことがある。富永太郎というひとのものであるが、あの中の詩二篇、訳詩一篇は、いまでも私の暗い胸のなかに灯をともす。唯一無二のもの。不朽のもの。書簡集の中には絶対にないもの。

兵法

文章の中の、ここの箇所は切り捨てたらよいものか、

それとも、このままのほうがよいものか、途方にくれた場合には、必ずその箇所を切り捨てなければいけない。いわんや、その箇所に何か書き加えるなど、もってのほかというべきであろう。

In a word

久保田万太郎か小島政二郎か、誰かの文章の中でたしかに読んだことがあるような気がするのだけれども、

あるいは、これは私の思いちがいかも知れない。芥川龍之介が、論戦中によく「つまり？」という問を連発して論敵をなやましたものだ、という懐古談なのだ。久保万か、小島氏か、一切忘れてしまったけれども、とにかく、ひどくのんびり語っていた。これには、わたくしたち、ほとほと閉口いたしましたもので、というような口調であった。いずくんぞ知らん、芥川はこの「つまり」を摑みたくて血まなこになって追いかけ追いかけ、はては、看護婦、子守娘にさえ易々（やすやす）とできる毒薬自殺をしてしまった。かつての私もまた、この「つまり」を追及するに急であった。ふんぎりが欲し

かった。路草（みちくさ）を食う楽しさを知らなかった。循環小数の奇妙を知らなかった。動かざる、久遠（くおん）の真理を、いますぐ、この手で摑みたかった。

「つまりは、もっと勉強しなくちゃいかんということさ。」「お互いに。」徹宵、議論の揚句（あげく）の果（はて）は、ごろんと寝ころがって、そう言って二人うそぶく。それが結論である。それでいいのだとこのごろ思う。

私はたいへんな問題に足を踏みいれてしまったようである。はじめは、こんなことを言うつもりじゃなかった。

In a word という小題で、世人、シェストフを贋物（がんぶつ）

の一言で言い切り、構光利一を駑馬の二字で片づけ、懐疑説の矛盾をわずか数語でもって指摘し去り、ジッドの小説は二流也と一刀のもとに屠り、日本浪曼派は苦労知らずと蹴って落ちつき、はなはだしきは読売新聞の壁評論氏の如く、一篇の物語（私の「猿ケ島」）を一行の諷刺、格言に圧縮せむと努めるなど、さまざまの殺伐なるさまを述べようと思っていたのだが、秋空のせいか、ふっと気がかわって、われながら変なことになってしまった。これは、明かに失敗である。

病軀の文章とそのハンデキャップに就いて

確かに私は、いま、甘えている。家人は私を未だ病人あつかいにしているし、この戯文を読むひとたちもまた、私の病気を知っている筈である。病人ゆえに、私は苦笑でもって許されている。

君、からだを頑健にして置きたまえ。作家はその伝記の中で、どのような三面記事をも作ってはいけない。

追記。文芸冊子「散文」十月号所載山岸外史の「デ

カダン論」は細心鏤刻（るこく）の文章にして、よきものに触れたき者は、これを読め。

「衰運」におくる言葉

ひややかにみづをたたへて
かくあればひとはしらじな
ひをふきしやまのあととも

右は、生田長江のうたである。「衰運」読者諸兄へのよき暗示ともなれば幸甚である。

君、あとひとつき寝れば、二十五歳、深く自愛し、そろそろと路なき路にすすむがよい。そうして、不抜の高き塔を打ちたて、その塔をして旅人にむかい百年のちまで、「ここに男ありて、――」と必ず必ず物語らせるがよい。私の今宵のこの言葉を、君、このまま素直に受けたまえ。

ダス・ゲマイネに就いて

いまより、まる二年ほどまえ、ケエベル先生の「シルレル論」を読み、否、読まされ、シルレルはその作品に於いて、人の性よりしてダス・ゲマイネ（卑俗）を駆逐し、ウール・シュタンド（本然の状態）に帰らせた。そこにこそ、まことの自由が生れた。そんな所論を見つけたわけだ。ケエベル先生は、かの、きよらなる顔をして、「私たち、なかなかにこのダス・ゲマイネという泥地から足を抜けないもので、――」と嘆じ

ていた。私もまた、かるい溜息をもらした。「ダス・ゲマイネ」「ダス・ゲマイネ」この想念のかなしさが、私の頭の一隅にこびりついて離れなかった。

いま日本に於いて、多少ともウール・シュタンドに近き文士（ぶんし）は、白樺派の公達（きんだち）、葛西（かさい）善蔵、佐藤春夫。佐藤、葛西、両氏に於いては、自由などというよりは、稀代（きたい）のすねものとでも言ったほうが、よりよく自由という意味を言い得て妙なふうである。ダス・ゲマイネは、菊池寛である。しかも、ウール・シュタンドにせよ、ダス・ゲマイネにせよ、その優劣をいますぐここで審判するなど、もってのほかというべきであろう。

人ありて、菊池寛氏のダス・ゲマイネのかなしさを真正面から見つめ、論ずる者なきを私はかなしく思っている。さもあらばあれ、私の小説「ダス・ゲマイネ」発表数日後、つぎの如き全く差出人不明のはがきが一枚まい込んで来たのである。

うつしみに
きみのゑがきし
をとめのゑ
うらふりしけふ
こころわびしき

右、春の花と秋の紅葉といずれ美しきという題にて。

よみ人しらず。

名を名乗れ！　私はこの一首のうたのために、確実に、七八日、ただ、胸を焦がさむほどにわくわくして歩きまわっていた。ウール・シュタンドも、ケエベル先生もあったものでなし。所詮、私は、一箇の感傷家にすぎないのではないのか。

金銭について

ついに金銭は最上のものでなかった。いま私、もし千円もらっても、君がほしければ、君に、あげる。のこっているものは、蒼空（あおぞら）の如き太古のすがたとどめたる汚れなき愛情と、――それから、もっとも酷薄にして、もっとも気永なる復讐心。

放心について

　森羅万象の美に切りまくられ踏みつけられ、舌を焼いたり、胸を焦がしたり、男ひとり、よろめきつつも、或る夜ふと、かすかにひかる一条の路を見つけた！と思い込んで、はね起きる。走る。ひた走りに走る。一瞬間のできごとである。私はこの瞬間を、放心の美と呼称しよう。断じて、ダス・デモニッシュのせいではない。人のちからの極致である。私は神も鬼も信じていない。人間だけを信じている。華厳（けごん）の滝が涸（か）れた

ところで、私は格別、痛嘆しない。けれども、俳優、羽左衛門の壮健は祈らずに居れないのだ。柿右衛門の作ひとつにでも傷をつけないように。きょう以後「人工の美」という言葉をこそ使うがよい。いかに天衣なりといえども、無縫ならば汚くて見られぬ。

附言する。かかる全き放心の後に来る、もの凄(すさま)じきアンニュイを君知るや否や。

世渡りの秘訣

節度を保つこと。節度を保つこと。

緑雨

保田君曰く、「このごろ緑雨を読んでいます。」緑雨かつて自らを正直正太夫と称せしことあり。保田君。この果敢なる勇気にひかれたるか。

ふたたび書簡のこと

友人にも逢わず、ひとり、こうして田舎に居れば、恥多い手紙を書く度数もいよいよしげくなるわけだ。けれども、先日、私は、作家の書簡集、日記、断片をすべてくだらないと言ってしまった。いまでも、そう思っている。よし、とゆるした私の書簡は私の手で発表する。以下、二通。（文章のてにをはの記憶ちがいは許せ。）

保田君。

ぼくもまた、二十代なのだ。舌焼け、胸焦げ、空高き雁（かり）の声を聞いている。今宵、風寒く、身の置きどころなし。不一。

さらに一通は、

（眠られぬままに、ある夜、年長の知人へ書きやる。）

かなしいことには、あれでさえ、なおかつ、狂言にすぎなかった。われとわが額を壁に打ちつけ、この生命（いのち）絶たむとはかった。あわれ、これもまた、「文章」にすぎない。君、僕は覚悟している。僕の芸術は、おもちゃの持つ美しさと寸分異るところがないというこ

とを。あの、でんでん太鼓の美しさと。（一行あけて）
ほととぎす、いまわのきわの一声は、「死ぬるとも、巧言令色であれ！」

このほか三通、気にかかっている書簡があるのだけれど、それらに就いては後日、また機会もあろう。（ないかも知れぬ。）

追記。文芸冊子「非望」第六号所載、出方名英光の「空吹く風」は、見どころある作品なり。その文章駆使に当って、いま一そう、ひそかに厳酷な

るところあったなら、さらに申し分なかったろう
ものを。

わが儘(まま)という事

文学のためにわがままをするというのは、いいこと
だ。社会的には二十円三十円のわがまま、それをさえ
できず、いま更なんの文学ぞや。

百花撩乱（ひゃっかりょうらん）主義

福本和夫、大震災、首相暗殺、そのほか滅茶滅茶のこと、数千。私は、少年期、青年期に、いわば「見るべからざるもの。」をのみ、この眼で見て、この耳で聞いてしまった。二十七八歳を限度として、それよりわかい青年、すべて、口にいわれぬ、人知れない苦しみをなめているのだ。この身をどこに置くべきか。それさえ自分にわかっておらぬ。

ここに越ゆべからざる太い、まっ黒な線がある。ジェネレーションが、舞台が、少しずつ廻っている。彼我相通ぜぬ厳粛な悲しみ、否、嗚咽（おえつ）さえ、私には感じられるのだ。われらは永い旅をした。せっぱつまり、旅の仮寝の枕元の一輪を、日本浪曼派と名づけてみた。この一すじ。竹林の七賢人も藪（やぶ）から出て来て、あやうく餓死をのがれん有様、佳（よ）き哉（かな）、自ら称していう。「われは花にして、花作り。われ未だころあいを知らず。

Alles oder Nichts.」

またいう。「策略の花、可也。修辞の花、可也。沈黙の花、可也。理解の花、可也。物真似の花、可也。放

火の花、可也。われら常におのれの発したる一語一語に不抜の責任を持つ。」

あわれ、この花園の妖しさよ。

この花園の奇しき美の秘訣を問わば、かの花作りにして花なるひとり、一陣の秋風を呼びて応えん。「私たちは、いつでも死にます。」一語。二語ならば汚し。

花は、ちらばり乱れて、ひとつひとつ、咲き誇り、「生きて在るものを愛せよ」「おれは新しくない。けれども決して古くはならぬ」「いのちがけならば、すべて尊し」「終局において、人間は、これ語るに足らず」「不可解なのは藤村の表情」「いや、そのことについては、

私が」「いや、僕だ。僕だ。」「人は人を嘲（あざわら）うべきでない」云々。

日本浪曼派団結せよ、には非ず。日本浪曼派、またその支持者各々の個性をこそ、ゆゆしきものと思い、いかなる侮蔑をもゆるさず、また、各々の生きかた、ならびに作品の特殊性にも、死ぬるともゆずらぬ矜（ほこり）を持ち、国々の隅々にいたるまで、撩乱（りょうらん）せよ、である。

ソロモン王と賤民

私は生れたときに、一ばん出世していた。亡父は貴族院議員であった。父は牛乳で顔を洗っていた。遺児は、次第に落ちぶれた。文章を書いて金にする必要。私はソロモン王の底知れぬ憂愁も、賤民の汚なさも、両方、知っている筈だ。

文章

文章に善悪の区別、たしかにあり。面貌（めんぼう）、姿態の如きものであろうか。宿命なり。いたしかたなし。

感謝の文学

日本には、ゆだん大敵という言葉があって、いつも人間を寒く小さくしている。芸術の腕まえにおいて、あるレヴェルにまで漕（こ）ぎついたなら、もう決して上りもせず、また格別、落ちもしないようだ。疑うものは、

志賀直哉、佐藤春夫、等々を見るがよい。それでまた、いいのだとも思う。（藤村については、項をあらためて書くつもり。）ヨーロッパの大作家は、五十すぎても六十すぎても、ただ量で行く。マンネリズムの堆積（たいせき）である。ソバでもトコロテンでも山盛にしたら、ほんとうに見事だろうと思われる。藤村はヨーロッパ人なのかも知れない。

けれども、感謝のために、私は、あるいは金のために、あるいは子供のために、あるいは遺書のために、苦労して書いておるにすぎない。人を嘲えず、自分だけを、ときたま笑っておる。そのうちに、わるい文学

は、はたと読まれなくなる。民衆という混沌の怪物は、その点、正確である。きわだってすぐれたる作品を書き、わがことおわれりと、晴耕雨読、その日その日を生きておる佳い作家もある。かつて祝福されたる人。ダンテの地獄篇を経て、天国篇まで味わうことのできた人。また、ファウストのメフィストだけを気取り、グレエトヘンの存在をさえ忘れている復讐の作家もある。私には、どちらとも審判できないのであるが、これだけは、いい得る。窓ひらく。好人物の夫婦。出世。蜜柑。春。結婚まで。鯉。あすなろう。等々。生きていることへの感謝の念でいっぱいの小説こそ、不滅の

ものを持っている。

審判

人を審判する場合。それは自分に、しかばねを、神を、感じているときだ。

無間（むけん）奈落

押せども、ひけども、うごかぬ扉が、この世の中にある。地獄の門をさえ冷然とくぐったダンテもこの扉については、語るを避けた。

余談

ここには、「鷗外と漱石」という題にて、鷗外の作品、

なかなか正当に評価せられざるに反し、俗中の俗、夏目漱石の全集、いよいよ華やかなる世情、涙出ずるほどくやしく思い、参考のノートや本を調べたけれども、「僕輩」の気折れしてものにならず。この夜、一睡もせず。朝になり、ようやく解決を得たり。解決に曰く、時間の問題さ。かれら二十七歳の冬は、云々。へんに考えつめると、いつも、こんな解決也。

いっそ、いまは記者諸兄と炉をかこみ、ジャアナルということの悲しさについて語らん乎。

私は毎朝、新聞紙上で諸兄の署名なき文章ならびに写真を見て、かなしい気がする。（ときたま不愉快な

ることもあり。）これこそ読み捨てられ、見捨てられ、それっきりのもののような気がして、はかなきものを見るもの哉と思うのである。けれども、「これが世の中だ」と囁（ささや）かれたなら、私、なるほどとうなずくかもしれぬ気配をさえ感じている。ゆく水は二度とかえらぬそうだ。せいせいるてんという言葉もある。この世の中に生れて来たのがそもそも、間違いの発端と知るべし。

Alles Oder Nichts

イブセンの劇より発し少しずつヨオロッパ人の口の端に上りしこの言葉が、流れ流れて、今では、新聞当選のたよりげなき長編小説の中にまで、易々とはいりこんでいたのを、ちらと見て、私自身、嘲弄されたと思いこみむっとなった。私の思念の底の一すじのせんかんたる渓流もまた、この言葉であったのだから。

私は小学校のときも、中学校のときも、クラスの首席であった。高等学校へはいったら、三番に落ちた。私はわざと手段を講じてクラスの最下位にまで落ちた。

大学へはいり、フランス語が下手で、屈辱の予感からほとんど学校へ出なかった。文学に於いても、私は、誰のあなどりも許すことが出来なかった。完全に私の敗北を意識したなら、私は文学をさえ、止すことが出来る。

けれども私は、或る文学賞の候補者として、私に一言の通知もなく、そうして私が蹴落されていることまで、附け加えて、世間に発表された。人おのおの、不抜の自尊心のほどを、思いたまえ。しかるに受賞者の作品を一読するに及び、告白すれば、私、ひそかに安堵（あんど）した。私は敗北しなかった。私は書いてゆける。

誰にも許さぬ私ひとりの路をあるいてゆける確信。

私、幼くして、峻厳酷烈（しゅんげんこくれつ）なる亡父、ならびに長兄に叩きあげられ、私もまた、人間として少し頑迷なるところあり、文学に於いては絶対に利己的なるダンディスムを奉じ、十年来の親友をも、みだりに許さず、死して、なお、旗を右手に歯ぎしりしつつ巷（ちまた）をよろばいあるくわが身の執拗（しつよう）なる業（ごう）をも感じて居るのだ。一朝、生活にことやぶれ、万事窮したる揚句（あげく）の果には、耳をつんざく音と共に、わが身は、酒井真人と同じく、「文芸放談」。どころか、「文芸糞談（ふんだん）」。という雑誌を身の生業（なりわい）として、石にかじりついても、生きのびて行くや

も知れぬ。秀才、はざま貫一、勉学を廃止して、ゆたかな金貸し業をこころざしたというテエマは、これは今のかずかずの新聞小説よりも、いっそう切実なる世の中の断面を見せて呉れる。

私、いま、自らすすんで、君がかなしき藁半紙に、わが心臓つかみ出したる詩を、しるさむ。私、めったの人には断じて見せなかった未発表の大事の詩一篇。附言する。われ藁半紙のゆえにのみしるす也と思うな。原稿用紙二枚に走り書きしたる君のお手紙を読み、謂わば、屑籠の中の蓮を、確実に感じたからである。君もまたクライストのくるしみを苦しみ、凋落のボ

オドレエルの姿態に胸を焼き、焦がれ、たしかに私と
甲乙なき一二の佳品かきたることあるべしと推量した
からである。ただし私、書くこと、この度一回に限る。
私どんなひとでも、馴れ合うことは、いやだ。

因果

射的を

好む

頭でっかちの

弟。

兄は、いつでも、生命を、あげる。

葦の自戒

その一。ただ、世の中にのみ眼をむけよ。自然の風景に惑溺（わくでき）して居る我の姿を、自覚したるときには、「われ老憊（ろうばい）したり。」と素直に、敗北の告白をこそせよ。

その二。おなじ言葉を、必ず、二度むしかえして口の端に出さぬこと。

その三。「未だし。」

感想について

感想なんて！　まるい卵もきり様ひとつで立派な四角形になるじゃないか。伏目がちの、おちょぼ口を装うこともできるし、たったいまたかまが原からやって来た原始人そのままの素朴の真似もできるのだ。私にとって、ただ一つ確実なるものは、私自身の肉体である。こうして寝ていて、十指を観る。うごく。右手の人差指。うごく。左の小指。これも、うごく。これを、

しばらく、見つめて居ると、「ああ、私は、ほんとうだ。」と思う。他は皆、なんでも一切、千々(ちぢ)にちぎれ飛ぶ雲の思いで、生きて居るのか死んで居るのか、それさえ分明しないのだ。よくも、よくも！　感想だなぞと。

遠くからこの状態を眺めている男ひとり在りて曰く、「たいへん簡単である。自尊心。これ一つである。」

すらだにも

金槐集（きんかいしゅう）をお読みのひとは知って居られるだろうが、実朝（さねとも）のうたの中に、「すらだにも。」なる一句があった。前後はしかと覚えて居らぬが、あわれ、けだものすらだにも、云々というような歌であった。

二十代の心情としては、どうしても、「すらだにも。」といわなければならぬところである。ここまで努めて、すらだにも、と口に出したくなって来るではないか。実朝を知ること最も深かった真淵（まぶち）、国語をまもる意味にて、この句を、とらず。いまになりては、いずれも佳（よ）きことをしたと思うだけで、格別、真淵をうらまない。

慈眼

「慈眼。」といぅのは亡兄の遺作（へんな仏像）に亡兄みずから附したる名前であって、その青色の二尺くらいの高さの仏像は、いま私の部屋の隅に置いて在るが、亡兄、二十七歳、最後の作品である。二十八歳の夏に死んだのだから。

そういえば、私、いま、二十七歳。しかも亡兄のか

たみの鼠色の縞の着物を着て寝て居る。　二三年まえ、罪なきものを殴り、蹴ちらかして、馬の如く巷を走り狂い、いまもなお、ときたま、余燼ばくはつして、とりかえしのつかぬことをしてしまうのである。どうにでもなれと、一日一ぱいふんぞりかえって寝て居ると、わが身に、慈眼の波ただよい、言葉もなく、にこやかに、所謂えびす顔になって居る場合が多い。われながら、まるでたわいがないのだ。

　この項、これだけのことで、読者、不要の理窟を附さぬがよい。

重大のこと

知ることは、最上のものにあらず。人智には限りありて、上は——氏より、下は——氏にいたるまで、すべて似たりよったりのものと知るべし。
重大のことは、ちからであろう。ミケランジェロは、そんなことをせずともよい豊かな身分であったのに、人手は一切借りず何もかもおのれひとりで、大理石塊を、山から町の仕事場までひきずり運び、そうして、

からだをめちゃめちゃにしてしまった。
附言する。ミケランジェロは、人を嫌ったから、あんなに人に嫌われたのだそうである。

敵

私をしんに否定し得るものは、（私は十一月の海を眺めながら思う。）百姓である。十代まえからの水呑百姓、だけである。

丹羽文雄、川端康成、市村羽左衛門、そのほか。私には、かぜ一つひいてさえ気にかかる。

追記。本誌連載中、同郷の友たる今官一君の「海鷗の章。」を読み、その快文章、私の胸でさえ躍らされた。このみごとなる文章の行く先々を見つめ居る者、けっして、私のみに非ざることを確信して居る。

健康

なんにもしたくないという無意志の状態は、そのひとが健康だからである。少くとも、ペエンレッスの状態である。それでは、上は、ナポレオン、ミケランジェロ、下は、伊藤博文、尾崎紅葉にいたるまで、そのすべての仕事は、みんな物狂いの状態から発したものなのか。然り。間違いなし。健康とは、満足せる豚。眠たげなポチ。

K君

おそるおそる、たいへんな秘密をさぐるが如き、ものものしき仕草で私に尋ねた。「あなたは、文学がお好きなのですか。」私はだまって答えなかった。面貌だけは凛乎（りんこ）たるところがあったけれど、なんの知識もない、十八歳の少年なのである。私にとって、唯一無二の苦手であった。

ポオズ

はじめから、空虚なくせに、にやにや笑う。「空虚のふり。」

絵はがき

この点では、私と山岸外史とは異るところがある。

私、深山のお花畑、初雪の富士の霊峰。白砂に這(は)い、

ひろがれる千本松原、または紅葉に見えかくれする清姫滝、そのような絵はがきよりも浅草仲店の絵はがきを好むのだ。人ごみ。喧噪（けんそう）。他生の縁あってここに集（つど）い、折も折、写真にうつされ、背負って生れた宿命にあやつられながら、しかも、おのれの運命開拓の手段を、あれこれと考えて歩いている。私には、この千に余る人々、誰ひとりをも笑うことが許されぬ。それぞれ、努めて居るにちがいないのだ。かれら一人一人の家屋。ちち、はは。妻と子供ら。私は一人一人の表情と骨格とをしらべて、二時間くらいの時を忘却する。

いつわりなき申告

黙然たる被告は、突如立ちあがって言った。
「私は、よく、ものごとを識っています。もっと識ろうと思っています。私は卒直であります。卒直に述べようと思っています。」
裁判長、傍聴人、弁護士たちでさえ、すこぶる陽気に笑いさざめいた。被告は坐ったまま、ついにその日一日おのれの顔を両手もて覆っていた。夜、舌を噛み

切り、冷くなった。

乱麻（らんま）を焼き切る

小説論が、いまのように、こんぐらかって来ると、一言、以（もっ）て之（これ）を覆（おお）いたくなって来るのである。フランスは、詩人の国。十九世紀の露西亜（ロシア）は、小説家の国なりき。日本は、古事記。日本書紀。万葉の国なり。長編小説などの国には非（あら）ず。小説家たる君、まず異国人

になりたまえ。あれも、これも、と佳き工合には、断じていかぬよう也。君の兄たり友たり得るもの、プウシキン、レエルモントフ、ゴオゴリ、トルストイ、ドストエフスキイ、アンドレエフ、チエホフ、たちまち十指にあまる勢いではないか。

最後のスタンドプレイ

ダヴィンチの評伝を走り読みしていたら、はたと一

枚の挿画に行き当った。最後の晩餐(ばんさん)の図である。私は目を見はった。これはさながら地獄の絵掛地。ごったがえしの、天地震動の大騒ぎ。否。人の世の最も切なき阿修羅(あしゅら)の姿だ。

　十九世紀のヨオロッパの文豪たちも、幼くしてこの絵を見せられ、こわき説明を聞かされたにちがいない。「われを売る者、この中にひとりあり。」キリストはそう呟(つぶや)いて、かれの一切の希望をさらっと捨て去った、刹那(せつな)の姿を巧みにとらえた。ダヴィンチは、キリストの底しれぬ深い憂愁と、われとわが身を静粛に投げ出したるのちの無限のいつくしみの念とを知っていた。

そうしてまた、十二の使徒のそれぞれの利己的なる崇敬の念をも悉知していた。よし。これを一つ、日本浪曼派の同人諸兄にたのんで、芝居をしてもらおう。精悍無比の表情を装い、斬人斬馬の身ぶりを示して居るペテロは誰。おのれの潔白を証明することにのみ急なる態のフィリッポスは誰。ただひたすらに、あわてふためいて居るヤコブは誰。キリストの胸のおん前に眠るが如くうなだれて居るこの小鳩のように優美なるヨハネは誰。そうして、最後に、かなしみ極りてかえって、ほのかに明るき貌の、キリストは誰。

山岸、あるいは、自らすすんでキリストの役を買っ

て出そうであるが、果して、どういうものであるか。中谷孝雄なる佳(よ)き青年の存在をもゆめ忘れてはならないし、そのうえ、「日本浪曼派」という目なき耳なき混沌(こんとん)の怪物までひかえて居る。ユダ。左手もて何やらんおそろしきものを防ぎ、右手もて、しっかと金嚢(きんのう)を摑んで居る。君、その役をどうか私にゆずってもらいたい。私、「日本浪曼派」を愛すること最も深く、また之を憎悪するの念もっとも高きものがあります故。

冷酷ということについて

厳酷と冷酷とは、すでにその根元に於いて、相違って居るものである。厳酷、その奥底には、人間の本然（ほんねん）の、あたたかい思いやりで一ぱいであるのだが、冷酷は、ちゃちなガラスの器物の如きもので、ここには、いかなる花ひとつ、咲きいでず、まるで縁なきものである。

わがかなしみ

夜道を歩いていると、草むらの中で、かさと音がする。蝮蛇（まむし）の逃げる音。

文章について

文士というからには、文に巧みなるところなくては、かなうまい。佳き文章とは、「情籠（こも）りて、詞舒（ことばの）び、心

のままの誠（まこと）を歌い出でたる」態のものを指していう也（なり）。
情籠りて云々は上田敏、若きこころの文章である。

ふと思う

なんだ、みんな同じことを言っていやがる。

Y子

そのささやきには真摯（しんし）の響きがこもっていた。たった二度だけ。その余（よ）は、私を困らせた。

「私、なんだか、ばかなことを言っちゃったようね。」

「私にだって個性があるわよ。でも、あんなに言われたら黙っているよりほかに仕様がないじゃないの。」

言葉の奇妙

「舌もつれる。」「舌の根をふるわす。」「舌を巻く。」「舌そよぐ。」

まんざい

私のいう掛合いまんざいとは、たとえば、つぎの如きものを指して言うのである。

問。「君はいったい、誰に見せようとして、紅（べに）と鉄漿（かね）

とをつけているのであるか。」
答。「みんな、様（さま）ゆえ。おまえゆえ。」
へらへら笑ってすまされる問答ではないのである。
殴るのにさえ、手がよごれる。君の中にも！

わが神話

いんしゅう、いなばの小兎。毛をむしられて、海水に浸り、それを天日でかわかした。これは痛苦のはじ

まりである。
いんしゅう、いなばの小兎。淡水でからだを洗い、蒲（がま）の毛を敷きつめて、その中にふかふかと埋って寝た。これは、安楽のはじまりであろう。

最も日常茶飯事的なるもの

「おれは男性である。」この発見。かれは家人の「女性。」に気づいてから、はじめて、かれの「男性。」に

気づいた。同棲（どうせい）、以来、七年目。

蟹（かに）について

阿部次郎のエッセイの中に、小さい蟹が自分のうちの台所で、横っ飛びに飛んだ。蟹も飛べるのか、そう思ったら、涙が出たという文章があった。あそこだけは、よし。

私の家の庭にも、ときたま、蟹が這って来る。君は、

芥子(けし)つぶほどの蟹を見たことがあるか。芥子つぶほどの蟹と、芥子つぶほどの蟹とが、いのちかけて争っていた。私、あのとき、凝然(ぎょうせん)とした。

わがダンディスム

「ブルウタス、汝(なんじ)もまた。」
人間、この苦汁を嘗(な)めぬものが、かつて、ひとりでも、あったろうか。おのれの最も信頼して居るものこ

そ、おのれの、生涯の重大の刹那に、必ず、おのれの面上に汚き石を投ずる。はっしと投ずる。

さきごろ、友人保田与重郎の文章の中から、芭蕉の佳き一句を見いだした。「朝がほや昼は鎖おろす門の垣。」なるほど、これに限る。けれども、――また、――否。これに限る。これに限る！

「晩年」に就いて

私はこの短篇集一冊のために、十箇年を棒に振った。まる十箇年、市民と同じさわやかな朝めしを食わなかった。私は、この本一冊のために、身の置きどころを失い、たえず自尊心を傷けられて世のなかの寒風に吹きまくられ、そうして、うろうろ歩きまわっていた。数万円の金銭を浪費した。長兄の苦労のほどに頭さがる。舌を焼き、胸を焦がし、わが身を、とうてい恢復できぬまでにわざと損じた。百篇にあまる小説を、破り捨てた。原稿用紙五万枚。そうして残ったのは、辛うじて、これだけである。これだけ。原稿用紙、六百枚にちかいのであるが、稿料、全部で六十数円であ

る。

けれども、私は、信じて居る。この短篇集、「晩年」は、年々歳々、いよいよ色濃く、きみの眼に、きみの胸に滲透して行くにちがいないということを。私はこの本一冊を創るためにのみ生れた。きょうよりのちの私は全くの死骸である。私は余生を送って行く。そうして、私がこののち永く生きながらえ、再度、短篇集を出さなければならぬことがあるとしても、私はそれに、「歌留多（かるた）」と名づけてやろうと思って居る。歌留多、もとより遊戯である。しかも、全銭を賭ける遊戯である。滑稽にもそれからのち、さらにさらに生きながら

え、三度目の短篇集を出すことがあるならば、私はそれに、「審判」と名づけなければいけないようだ。すべての遊戯にインポテンスになった私には、全く生気を欠いた自叙伝をぼそぼそ書いて行くよりほかに、路がないであろう。旅人よ、この路を避けて通れ。これは、確実にむなしい、路なのだから、と審判という燈台は、この世ならず厳粛に語るだろう。けれども、今宵の私は、そんなに永く生きていたくない。おのれのスパルタを汚すよりは、錨（いかり）をからだに巻きつけて入水（じゅすい）したいものだとさえ思っている。

さもあらばあれ、「晩年」一冊、君のその両手の垢（あか）で

黒く光って来るまで、繰り返し繰り返し愛読されることを思うと、ああ、私は幸福だ。――一瞬間。ひとは、その生涯に於いて、まことの幸福を味い得る時間は、これは、百米十秒一どころか、もっと短いようである。声あり。「嘘だ！　不幸なる出版なら、やめるがよい。」答えて曰く、「われは、いまの世に二となき美しきもの。メジチのヴィナス像。いまの世のまことの美の実証を、この世にのこさんための出版也。

　見よ！　ヴィナス像の色に出ずるほどの羞恥のさま。これ、わが不幸のはじめ。また、春夏秋冬つねに裸体にして、とわに無言、やや寒き貌こそ、（美人薄命、）

天のこの冷酷極りなき嫉妬（しっと）の鞭（むち）を、かの高雅なる眼もてきみにそと教えて居る。」

気がかりということに就いて

気がかりということに、黒白の二種、たしかにあることを知る。なにわぶしの語句、「あした待たるる宝船。」と、プウシキンの詩句、「あたしは、あした殺される。」とは、心のときめきに於いては同じようにも思

われるだろうが、熟慮半日、確然と、黒白の如く分離し在るを知れり。

宿題

「チェック・チャックに就いて。」「策略ということについて。」「言葉の絶対性ということについて。」「沈黙は金なりということに就いて。」「野性と暴力について。」「ダンディスム小論。」「ぜいたくに就いて。」「出

世について。」「羨望について。」「原始のセンチメンタリティということについて。」そのほか、甚だけちのようなれども、題名を言われぬもの、十七八項目くらい。少しずつノオトに書きしるしていっているのであるが、いま、「文芸雑誌。」創刊号になにか書くことをすすめられ、何を書こうかと、ノオトを二冊も三冊も出してあちらを覗き、こちらを覗きして、夕暮より、朝までかかった。どれもこれも、胸にひっかからまり、工合いよくゆかぬ。牛乳を飲んで、朝の新聞を読んでいるうちに、わかった。

私の心は千里はなれた磯にいて、浪にくるくる舞い

狂っていたのである。私のはじめての本の出版。それで、すべてに、合点がついた。宿題。たくまずして、砂子屋書房主人、山崎剛平氏に、ばとんをお渡ししなければならなくなった。私の本がどれくらい、売れるであろうか。私の本の装釘（そうてい）は、うまく行くであろうか。潮どきと鷗（かもめ）と浪の関係。

附記。これは、半ば以上、私の本の、広告のために書いた。私、昭和十一年よりは、稿料、全く無しか、さもなくば、小説一枚五円、その他のくさぐさの文章一枚三円ときめた。

今年正月号には、私の血一滴まじって居るとさえ思わせたる編輯者（へんしゅうしゃ）の手紙のため。あるいは、書きますと去年の正月にお約束して、以後、一年間、自らすすんでいよいよ強くお約束してしまい、ついには、もの狂いの状態にさえなったがため。私をつねにやわらかくなぐさめ顔の、而（しか）も文意あくまで潔白なる編輯部の手紙のため、その他、とにかく、いちどは書かなければならぬ事情ありて、断片の語、二十枚あまり書いた。稿料はすべて、私のほうから断って書いた。「人おのおの。おのれひとりの業務にのみ、努めること第一であるが、たまには隣人の、

かなしくも不抜の自尊心を、そ知らぬふりして、あたためてやりたまえ。」

底本：「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房
1989（平成元）年6月27日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月
初出：はしがき～ふたたび書簡のこと「日本浪曼派」
1935（昭和10）年8月～12月
わが儘という事～余談「東京日日新聞」
1935（昭和10）年12月14日、15日
Alles Oder Nichts「葦」
1950（昭和25）年8月10日発行

葦の自戒〜敵「作品」
1936（昭和11）年1月1日発行
健康〜最後のスタンドプレイ「文芸通信」
1936（昭和11）年1月1日発行
冷酷ということについて〜わがダンディスム
「文芸汎論」
1936（昭和11）年1月1日発行
「晩年」に就いて〜宿題「文芸雑誌」
1936（昭和11）年1月1日発行
※底本には「もの思う葦（その一）」「同（その二）」「同（その三）」と三部に分けて収録されていますが、この

ファイルでは一続きに編成しました。
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００５年３月21日作成
２０１１年１月29日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。